

問一 次の文章を読んで、後の問いに答えましょう。

ある春の日暮れです。

(※1)唐の都洛陽の西の門の下に、(1)ほんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。若者は名を杜子春といて、元は金持の息子でしたが、今は(2)財産を使い尽くして、その日の暮らしにも困るくらい、あわれな身分になっているのです。

何しろその頃洛陽といえ、天下に並ぶものがない、(※2)繁盛を極めた都ですから、(イ)往来にはまだひっきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当たっている、油のような夕日の光の中に、老人のかぶった(※3)紗の帽子や、(※4)トルコの女の金の耳環や、白馬に飾った色系の(※5)手綱が、(ウ)たえず流れて行く様子は、まるで画のような美しさです。

しかし杜子春は相変わらず、門の壁に身をもたせて、ぼんやり空ばかり眺めていました。空には、もう細い月が、(オ)うらうらとなびびいた(※6)霞の中に、まるで爪のあとかと思う程、かすかに白く浮かんでいるのです。

「日は暮れるし、(エ)腹はへるし、その上もうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうだし——こんな(オ)まずしい思いをして生きていくくらいなら、いっそ川へでも身を投げて、死んでしまったほうがましかも知れない」

杜子春はひとりさつきから、(4)こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。

(『杜子春』芥川龍之介。出題にあたり一部書き改めたところがある。)

(※1) 唐…中国の王朝の名前 (618～907)

(※2) 繁盛…商店などの活気があること

(※3) 紗…薄い絹織物

(※4) トルコ…現トルコ共和国

(※5) 手綱…人が手にとって馬をあやつる綱。

(※6) 霞…霧や煙が薄い帯のように見える現象

(1) 文章中の 線部について、漢字の読みをひらがなで、ひらがなは漢字に直して正しく書きましよう。送りがなが必要なものは送りがなも書きましよう。

(ア) 財産

(イ) 往来

(ウ) たえず

(エ) へる

(オ) まずしい

(2) 本文中の 線部「油のような夕日の光」と同じようにたどえを使った表現を、文章線の①く④の中から一つ選び、番号で答えましよう。

問二

次の文章を読んで、後の問いに答えましょう。

どどどど どどどど どどどど どどどど

青いくるみも吹きとばせ

すっぱいかりんも吹きとばせ

どどどど どどどど どどどど どどどど

谷川の岸に小さな学校がありました。

教室はたった一つでしたが生徒は三年生がないだけで、あとは一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートのくらいでしたが、すぐうしろは栗の木のあるきれいな草の山でしたし、運動場のすみにはごぼごぼつめたい水を噴く岩穴もあつたのです。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪袴をはいた二人の一年生の子がどてをまわって運動場にはいつて来て、まだほかにだれも来ていないのを見て、「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」とわかるがわる叫びながら大よろこびで門を入つて来たのですが、ちよつと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合わせてぶるぶるふるえましたが、ひとりはどうとう泣き出してしまいました。というわけは、そのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしな赤い髪の子供がひとり、いちばん前の机にちゃんとすわっていたのです。そしてその机といったらまつたくこの泣いた子の自分の机だったのです。

『風の又三郎』宮沢賢治。出題にあたり、一部書き改めたところがある。

(1) 「反復法」という表現の工夫が文章中にされている箇所を 線を引きましょう。

(2) 文章中の 線「ごぼごぼ」のように、音や様子・状態を表していることば(擬音語や擬態語)を で囲まれた文章から三つ探して、そのことばを抜き出しましょう。(解答は出てくる順番通り書かなくてもよい)

□

□

□